闇の御子と電子の少女

新月暁

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、記憶喪失の少女と魔眼の槍使いが月の聖杯戦争を戦い抜く物語…

※注意

このお話は摸造、改変、時系列が不明などが多々出てきます。話の矛盾もあると思います。

誤字や脱字、話の大きな矛盾やタグなどに指摘があるならよろしくおねがいします。

目次

設定 1
序章 6

設定

真名：　ゼルクレア・ムーリフ
クラス：バーサーカー
出典：ケルト神話・アルスター神話
地域：アイルランド
属性：混沌・中庸
性別：女
身長：１６５㎝
体重：４５kg
イメージカラー：群青色
特技：狩り・獲物の解体
好きなもの：自分が好きだと思った者（物）達
苦手なもの：手加減
天敵：父
パラメーター

筋力Ｂ　耐久Ｃ　俊敏Ａ＋　魔力Ｂ　幸運Ｄ　宝具Ａ＋＋

クラススキル

狂化Ｅｘ

対魔力　Ｂ＋

魔眼　Ａ＋

神性（偽）Ｂ

※

狂化ＥＸ

彼女の誕生した理由故生まれながらに狂ってはいたが普通に会話は可能。

対魔力Ｂ＋

もし彼女が生まれながらに狂っていなければクラスはランサーであったであろう故の名残

魔眼Ａ＋

彼女の魔眼は彼女に敵意持つ者の命を奪う。

たとえ魔眼の力を封じていて、ゲッシュにより使われることが無くても人にとってその眼自体が大きな脅威である。

※ＦＧＯ風（人型特攻＋人型からのダメージカット）

神性（偽）B
彼女は神の血は引いていないが、神の力がその体には流れてしまっているため偽とはいえこのスキルを持つ。ランクがB―なのは彼女自身が完全な人ではないため。

保有スキル
原初のルーン
戦闘続行
闇の御子

※
闇の御子
光の御子と対をなす彼女の異名であると同時に彼女の力を恐れた人々により付けられた異名でもある。
彼女の本質を知らぬ者はその異名を聞いただけでもその身を恐怖で震わせた。
（敵全体の防御力ダウン、攻撃力ダウン、確率でスタン）

宝具

穿ち抉る死幻の槍（ゲイ・ボルク・ミラージュ）
ランクＡ＋
種別：対人宝具
レンジ：５～６０
最大補足：１人
（敵単体に超強化な攻撃＆チャージ減少＆確率で即死効果＆中確率でスタン）
彼女がスカサハから貰い生涯使い続けた槍を思い切り敵に投げつける宝具。
生前彼女が槍を投げる構えをしただけで１㎞先にいた戦士が自身がその槍に貫かれ死ぬ様子を幻想し、悲鳴をあげ、そのまま死に絶えたことからこの名がついた。

突き穿つ死翔の槍（ゲイ・ボルク）
魔槍ゲイ・ボルク本来の使い方。穿ち抉る死幻の槍はこの宝具をアレンジしたもの。

見た目
群青色の癖の強い髪を膝辺りまで伸ばし一つに括っていて、あほ毛が一本はねている。
眼はつり目で眼孔が細く緋色で、魔眼を解放すると濃い紫色になり、眼孔が更に細く

鋭くなる。宝具を使うさいはこちらの眼になる。
彼女の右目はもう潰れていて使いものにならないので、黒い魔封じの布で覆われている。
体に広がる血のように赤い呪いを意図的に隠せないので露出が多い。
服は群青色を基調にしている。
クー・フーリンとお揃いのピアスをしている。

序章

『…ふむ、君もダメか。』

…声が聞こえる。

口では残念そうな事を言っているが、なんの興味をもっていないような声が。

その声を聞いている間にも私の目は閉じられていく。今目を閉じてはいけないと思うが抗えず

遂に目は閉じら……

『そろそろ刻限だ。君を最後の候補者とし、その落選をもって今回の予選を終了しよう……さらばだ、安らかに〝消滅〟したまえ。』

その言葉に閉じられるはずだった目を見開いた。

――怖い。

ただそう思った。

痛みが怖い。

感覚の喪失が怖い。

他の死体と同じになるのが怖い。
――なにより
無意味に消える事が怖く、そして恐ろしく思った。
…立たないと。
そう思うが傷ついた体はほとんど動いてくれない。
それでも、今にも閉じそうな目を開き、爪を立てながら、歯を食いしばりながら、体に力を込める。
諦めない、絶対に諦めない。
だってこの手はまだ一度も、自分の意思で戦ってすらいないのだから――!!
『よく言いました!これまでの人達と違って、貴女の事は好きになれそうです!』
どこからともなく聞こえてきた、凛としていて、楽しげな誰かの声。
同時に群青色を基調とした一つのステンドグラスがパリンと割れた。
割れたガラスの破片がキラキラと舞うなか、私の前には一人の女性が立っていた。

「問います、貴女が私のマスターですか?」

青く長い髪に鮮やかな赤い瞳、露出の多い服に肌を這うように刻まれている、まるで血のように赤い紋様。

そしてその手には身の丈より長い槍が握られている

小首をかしげ楽しげに笑っている彼女に状況が理解できていない私はされど、確かな安堵から彼女の問いに頷いた

「此処に契約はなされました。これより我が槍は貴女の矛となり盾となりましょう!」

その細い体からは想像出来ない力強さで手を引かれる。

そして引かれた手がまるで蒸発するように熱くなったかと思うと彼女の体に刻まれた紋様のように赤い模様が浮かび上がった。

私はあっけにとられ目の前の彼女といきなり浮かび上がった模様を見ていた。

カシャン

…と、後ろから鳴った音に我に返った。

反射的に振り返ると先程の人形がこちらに向かってきていた。

先程までの事を思い出し、思わず体が後ろに下がる。

と、それと反するように女性が前に出た。
「とりあえずはあの人形を壊しましょうか。大丈夫ですよマスター、貴女は私が護りますから！」
そう言って明るく笑った彼女は槍を構え人形へと突っ込んでいった。
―そこからは一瞬の事だった。
人形が振りかぶった腕を軽やかに躱した彼女は躱した勢いのまま槍を人形を貫いた。その槍を抜けば人形は倒れ伏し、そのまま動かなくなった。
先程まで脅威でしかなかった人形は彼女の前では無力に等しかった。
先程まで自分の命を脅かしていた存在が動かなくなったことで体から緊張が取れて、力が抜け、膝が崩れた。
倒れそうになった私を女性が片手で受け止める。
「お疲れ様です、マスター。後の事は私に任せて今は眠っていていいですよ。…おやすみなさい。」
優しい声でそう言われながら頭を撫でられる感触に自然と目が閉じていく。
彼女が何者かは全く分からない。それでも彼女の傍は大丈夫だと、謎の安心感と共に私の意識は途切れた。

―そしてこれが私と彼女との長いようで短い物語の始まりだった。